

1. 共通テーマにおける取り組み

北区指定相談支援事業所連絡会 代表3名（相談支援専門員）からテーマに沿った事例の提供

事例①：20歳代女性（精神・発達障害） 母子家庭で1歳の子の育児が課題

保健センター、子育て支援課、子ども相談所、生活援護課、計画相談、居宅介護、精神科病院、訪問看護、保育所のネットワークが作れていて連携も取れている。子育てよりも本人が自分の生活を優先し、ネットでの対人交流、夜中のゲーム、課金やカードローンなどの課題があるが、本人の困り感はない。日常生活自立支援事業の利用も拒否する中で、地域でどのように支えていくかの課題が残る。

事例②：70歳代男性（精神障害） 介護保険非該当 ゴミ屋敷からの脱出が課題

保健センター、地域包括、計画相談、居宅介護、精神科病院のネットワークが作れていて連携も取れている。預貯金がある、臭いが少ない、近隣の苦情なし、人柄がよい、猫の世話ができるなどストレスが多い一方で、金銭管理や整理整頓、入浴ができていないことなどの原因を探る中で、「どうして良いのかわからない。」という本人の気持ちに寄り添う支援へ転換できた。こういった方の金銭管理や孤立などの課題が残る。

事例③：30歳代男性（知的障害） 父子家庭 対人関係、金銭管理に課題

地域活動支援センター、居宅介護、基幹相談、精神科病院、訪問看護、こころの健康センター、就労先が関わる中でそれぞれ途切れず支援を続けている。ギャンブル依存によるストレスの発散と蓄積を繰り返し、金銭管理をしている父を悩ませ、周囲の支援者でサポートしている状況。ストレスの影響で対人関係でのトラブルは多いが、就労は継続できていることが大きな成果となっている。金銭管理の理解、学習が難しい中で支援者間での連携を行いながら現状の生活を維持しているため、金銭管理と支援者の疲弊などの課題が残る。

○グループスーパービジョンの手法で、事例提供者の方の気づきを促し、新たな視点で本人への相談支援につなげた。

○シームレスな連携、支援に視点を置いたが、事例提供者が指定相談支援事業所連絡会の代表をされている相談支援専門員のため、ネットワークの形成、シームレスな連携は取れる体制は作れていた。

残った課題は「足りない資源」に焦点があたった形

事例1；親の障害による子育ての限界⇒地域で支えるための子の居場所＝子ども食堂

事例2；ペット問題の対処と予防策 高齢障害者の金銭管理や孤立

事例3；軽度知的障害者のお金の使い方、トラブル対処＝消費生活センターとの協働

＜取り組みから見えてきたこと＞

- ・今ある資源でどうにもならない事案は、支援者間の情報共有で対応の統一や役割分担等する中で乗り切っていたが、支援者の疲弊感は否めない。新たな社会資源の開発、今ある資源の役割や内容の再検討が必要に感じる。
- ・個々の子ども食堂との情報交換により、子どもの居場所のあり方について検討していきたい。社会貢献への意欲と障害児のニーズとをマッチさせたい。
- ・堺市立消費生活センターと協働し、障害者のお金のトラブルを顕在化させるとともに、今ある健常者へのトラブル対応策を、障害者版の成果物として視覚化し、支援者から当事者へ幅広く周知していきたい。